アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律（令和元（2019）年５月施行）

この法律は、アイヌの人々が日本の先住民族であることの認識を示すとともに、それに基づき、アイヌ施策の推進に関する基本理念等について定めることにより、アイヌの人々が民族としての誇りを持って生活することができ、及びその誇りが尊重される社会の実現を図り、もって全ての国民が相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現に資することを目的としています。

公益財団法人　アイヌ民族文化財団

アイヌ文化の振興とアイヌの伝統等に関する知識の普及啓発を図るため、次の事業を実施しています。

1 アイヌに関する総合的かつ実践的な研究の推進
2 アイヌ語の振興
3 アイヌ文化の振興
4 アイヌの伝統等に関する普及啓発
5 アイヌ文化の伝承者育成
6 民族共生象徴空間運営管理事業等
7 民族共生象徴空間収益事業

アイヌ文化交流センター

首都圏に居住するアイヌの人々の文化活動等を支援するとともに、アイヌの伝統や文化に関する知識の普及啓発を図るため、一般の方々に無料で自由にご利用いただける施設として、関係図書の閲覧や、DVD・ビデオなどの貸出、体験プランによる学習機会の提供などを行っています。

［所在地］〒111-0041 東京都台東区元浅草３丁目７番１号
住友不動産上野御徒町ビル（３階）
［電　話］03(5830)7547［開館時間］10:00 ～ 18:00
［休館日］日、月（国民の祝日・休日に当たる日を除く）、年末年始、国民の祝日・休日の翌日

このリーフレットに関する問合せは下記にお願いします。
東京都総務局人権部人権施策推進課
東京都新宿区西新宿2-8-1
電話：03(5388)2588

令和６(2024)年２月発行
印刷物規格表第４類　　印刷番号(5)49

ミックス紙 FSC FSC® C108044
VEGETABLE OIL INK
リサイクル適性Ⓐ この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

住　居

アイヌの人々が生活していた住居は、アイヌ語で「チセ」と呼ばれました。

チセの材料は、木や草など自然にある物が使われました。

柱にはくり、みずならなどが、梁（はり）や桁（けた）には「はんのき」など、腐りにくく長持ちする木が用いられました。

壁や屋根の葺材（ふきざい）のように、大量に必要なものにはその地方でたくさん採れるもの、たとえば胆振（いぶり）・日高ではよし、上川では笹、北海道東部・根室では樹皮などが多く使用されていました。

ウポポイ（民族共生象徴空間）（※）で再現されたチセです。

伝統的な建築技術は現代にも伝えられ、復元された伝統的なチセを北海道各地で見ることができます。

※アイヌの歴史・文化を学び伝えるナショナルセンターとして、令和２(2020) 年にオープンしました。
ホームページ　https://ainu-upopoy.jp

儀　式

アイヌの人々は、自然現象や動植物、人間の作る道具などすべてに「魂」が宿っていると考えていました。

その魂は人間にとって有益なものだけでなく、天災や病気などにもあり、このうち、人間の生活に必要なもの、人間の力の及ばない事象を「神」として敬いました。

そして神々の護りと生活の糧の提供があってはじめて、人々の平和な生活があると考えていました。

アイヌの人々はそのような生活の続くことを願い、神への祈りを行ったのです。

神々への祈りの多くは儀式を伴いました。代表的な儀式としてイオマンテが挙げられます。

イオマンテ（動物神の霊送り）

イオマンテは、熊やシマフクロウといったアイヌの人々にとって位の高い動物神をカムイモシリ（神の国）に送り帰す儀式です。これらは、神の国では人間と同じ姿をしていますが、人間の国に来るときに熊やシマフクロウの衣装をまとうため、その姿に見えるのだと考えられています。

イオマンテは、人間の国を訪れた熊やシマフクロウの神を歓迎し、人間の国の良さを体験してもらうことにより、再び訪問してくれるよう願いを込めた儀式なのです。

言　葉

アイヌ語は日本語とは違うもう一つの日本の言葉であり、語順は似ていますが、単語が大きく異なります。

かつてアイヌ語は、北海道をはじめ樺太や千島列島、東北地方の北部でも話されていました。しかし現在では、アイヌの人々でアイヌ語を話せる人も、日常生活では日本語を使って生活しています。

アイヌの人々は、口承によって豊かな文化や歴史、芸術などを語り継いできました。

アイヌの口承文芸の代表的なものに、英雄叙事詩などといわれる「ユカラ」が挙げられます。

アイヌ語を起源として日本語になったと思われる言葉には、「トナカイ」、「ラッコ」、「シシャモ」などのほか「登別」「稚内」など数多くの地名があります。

現在ではアイヌ語を後世に伝えるため、北海道を中心にアイヌ語講座が開かれるなど様々な活動が行われています。

アイヌ語によるあいさつの例

1 こんにちは、はじめまして
イランカラッテ（irankarapte）
2 ありがとう
イヤイライケレ（iyayraykere）
3 気をつけて行ってください＝さようなら
アプンノ パイェ ヤン（apunno paye yan）

現在ではアイヌ語の表記は、カタカナまたはローマ字で表記するのが一般的です。

アイヌの人々の人権

アイヌの文化と伝統を理解するために

衣服（木綿）
木綿（もめん）衣に白の木綿と絹や小袖などの古裂を細く切りぶせし、貼り付けと装飾を兼ねて縫取りを施したもの

東京都

このリーフレットには、音声コードが開いた四角の両面に印刷されています。
専用の読み上げ装置で読み取ると、記録されている情報を音声で聞くことができます。

発行に当たって

　アイヌの人々は古くから北海道などに居住し、自然と共生しながら、自然の恵みに感謝し、平和な暮らしを送ってきた民族です。独自の言語であるアイヌ語を持ち、口承文芸や伝統的儀礼などに代表される豊かな文化を発展させてきました。

　しかし、近世、近代の歴史の中で、同化政策などの影響もあり、アイヌの人々の伝統や文化は危機的な状況に追い込まれ、同時に貧困を余儀なくされました。また、アイヌの人々に対する誤った認識などから今なお差別や偏見が残っています。

　東京にもアイヌの人々が生活しています。民族としての誇りが尊重される社会の実現のためには、私たち一人一人がアイヌの人々の歴史や文化、言語や生活様式などについて理解し、尊重することが必要です。

鈎銛ーマレク
サケ漁などに使う道具

五弦琴ートンコリ

アイヌの方々のための電話相談

相談専用電話：0120-771-208
受付　月曜日～金曜日（※祝日、年末年始を除く）
時間　9:00 ～ 17:00
●相談無料●匿名可●秘密厳守

公益財団法人 人権教育啓発推進センター
〒105-0012
東京都港区芝大門2-10-12
KDX 芝大門ビル 4階

写真：公益財団法人アイヌ民族文化財団提供

アイヌの人々の歴史

　アイヌの人々は、北海道を中心とした地域に古くから住んでいました。15 ～ 16 世紀になると、多くの和人がこれらの地域に進出し、アイヌの人々の自由な交易活動は次第に制限され、生活の場が侵されるようになりました。

　明治時代になり、政府の植民政策による移住者の急増や土地政策、狩猟の禁止などによって、少数者となったアイヌの人々の生活領域はより一層狭められました。また、独自の風習は禁止され、教育の場などで日本語を使うことを強制されるなどの同化政策が進められ、民族独自の文化が失われていきました。アイヌの人々に対する農業の奨励や教育なども十分でなく、苦しい生活を強いられました。

　戦後になると、次第にアイヌの人々の生活環境の改善や教育の充実などが進められるようになり、平成 9（1997）年には、明治時代に公布された北海道旧土人保護法等が廃止され、「アイヌ文化振興法」が成立しています。

　平成 19（2007）年 9 月、「先住民族の権利に関する国際連合宣言」が国連総会で採択されたことを踏まえ、平成 20（2008）年 6 月、国会において「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が採択されました。国は「アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会」が取りまとめた報告書を受けて、平成 22（2010）年 1 月以降、「アイヌ政策推進会議」を開催し、総合的かつ効果的なアイヌ施策を進めています。

捧酒箸ーイクパスイ、**杯**ートゥキ
神へと祈る際に使用する儀礼用具

　令和元（2019）年 5 月には、「アイヌ文化振興法」が廃止され、アイヌの人々を先住民族と規定した「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」が施行されました。

アイヌとは

　「アイヌ」という言葉は、アイヌ語でのカムイ（神）に対する「人間」という意味で、民族の呼称としても使われています。ところが、長い歴史の中で、この言葉が正しく理解されず、侮辱の意味を込めて使われたこともあることから、アイヌ語で「同胞」という意味の「ウタリ」という言葉が使われるようになりました。しかし、「アイヌ」という言葉自体に悪い意味は全くないことから、最近ではこの言葉が再び使われるようになっています。

衣　服

　アイヌの人々の衣服には、素材や文様のつけ方によって様々な種類があり、地域によっても特徴があります。樹木などの繊維を紡いだ糸で作られたり、動物の毛皮や魚の皮なども使われました。また、本州や大陸から手に入れた絹や木綿の布も用いられました。衣服には晴れ着と普段着とがあり、博物館や写真などで目にする美しい文様のついた衣服の多くは、儀式の際に着た晴れ着です。

　儀式などの時には、身を飾る装身具として、はちまきや耳飾り、ガラスの玉を連ねた首飾りをしました。また、山歩きや農耕のときには、手甲（てっこう）や脚絆（きゃはん）をつけました。

　現在では、日常生活のなかでアイヌ民族独特の衣服を着ることはありません。

　しかし近年は伝統文化の見直しや復興が進み、儀式に参加するときや、歌や踊りを披露するときなどに晴れ着を着たり、衣装を作ったりすることが増えてきました。

衣服（樹皮繊維）

食文化

　アイヌの人々は、食べ物は自然の神々が与えてくれた恵みとして、神々に感謝しつつ必要な分だけ採取してきました。

　狩猟採集を主にしていたアイヌの人々は、野山の動物や植物を食料としていました。

　居住地域によって多少の違いが見られましたが、山ではエゾシカ、ウサギ、カモ類などを食材としました。川ではサケやマスなど、海では魚のほかアザラシやクジラなども捕らえていました。

　植物では主に山菜を利用し、春から夏にかけてはギョウジャニンニク、フキ、コゴミなどの葉や茎を、夏から秋にかけてはクルミ、クワ、ヤマブドウなどの実を主に採取していました。

　日常の基本的な調理法は、肉や魚などと季節の山菜を使った鍋物と、ヒエ、アワなどの穀物で作った粥です。

　儀式や祭事の際には、季節の素材を生かした煮物料理や団子など特別の料理が作られました。

　現代のアイヌの人々の食生活は、和食や洋食などが中心で、昔のままの食事をとることはほとんどありません。

　そのような中でも、昔ながらの食材を現代的に工夫して調理したり、伝統的な料理を儀式などの際に作ったりすることで食文化を継承しています。

伝統料理　焼き魚 - アマチェプ
魚にイマニッと呼ばれる串を刺し、囲炉裏で焼いたもの。